

---

# 青空の下で

桜内智紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青空の下で

### 【コード】

N0788H

### 【作者名】

桜内智紀

### 【あらすじ】

子供のころに出会った二人、そのときに運命は変わりだした

## 第一話 いつもの日々(前書き)

読みにくい所などがあります

## 第一話 いつもの日々

「・・・よ ねえ起き・・・て 朝だよ もう」

誰かが俺の眠りの邪魔をする

「ねえ 起きてってば！ けんちゃん」

でもここで起きてしまったら二度寝ができない

もう少し寝ていたい

俺は寝続けることにした

「もう 起きないって言うなら私にも考えがあるよ」

考え？一体何を？

「えい」

「うー！」

急に身動きが取れなくなつた代わりに甘い香りがした

「ううゝ重い」

何者かが俺の上に乗っているようだ

「もう 重いとは失礼ね 早く起きないけんちゃんが悪いのに」

「小鳥、わかつたから早くどいて」

「ああ ごめんね」

ようやく小鳥が俺の上から降りた

「あ、小鳥今何時だ？」

「もう7時半過ぎてるよ」

「ヤベ」

慌てて布団から跳ね起きた

「けんちゃん先降りてるから早く降りてきてね」

そついい残すと小鳥は俺の部屋から出て行った

彼女は名前は、市野谷小鳥いちのやのこむね 16歳 O型 日崎中学校3年生

同じ家に住む幼馴染、世話焼きで毎日起こしに着てくれる。

そして俺、梅井健太うめいけんた 15歳 B型 日崎中学校3年生

いろいろあつて小鳥の家にお世話になっている

俺は征服に着替えると下に降りていった

「やっと起きたんだ おに〜」

「遅刻しちゃうよ」

玄関には小鳥と奈那子が待っていた

俺の妹の 梅井奈那子<sup>つめいななこ</sup> 14歳 AB型 日崎中学校2年生

奈那子は俺が3歳の時にうちに引き取られた子どもで、俺とは一切血の繋がりが無いが幼い頃から兄妹をしている俺の大事な妹だ

「わりい」

俺たちは玄関を出て学校へと向かった

「おにーってばもうちよつと早めに起きたら？」

「いつつも、こと姉に起こしてもらってばっかでこと姉がかわいそうだよ」

「え？ 私は別に・・・」

「しょうがねーだろ朝に弱いんだから」

「そうよ けいちゃんだつて好きで寝坊してるんじゃないんだよ」

「こと姉はいつもおにーの肩を持つよね？」

「え？ 私は・・・いつもけいちゃんの見方だから・・・」

俺の顔が少し赤くなったのがわかった

「おまえよくそんな恥ずかしいこと言えるな〜」

「ううう〜」

小鳥は今になって自分が言ったことに気づいたのか頬を赤くして黙りこくっている

「おにーってほんと鈍感だよな〜」

「何がだ？」

「いやなにも〜」

結局、学校まで小鳥は赤くなつたまま黙っていた

キーコナー カーコナー

俺は予鈴が鳴る前に教室にたどり着くことが出来た

「よお おはようさん」

「博 おはよう」

話しかけてきたのは ふくおか ひろし 福岡博  
俺のクラスメイトで俺の大親友だ

「あ そうだ」

「なんだ？」

「なあお前、社会のレポートしてきたか？」

「あっ！」

（しまった ヤバイ、すっかり忘れてた 社会の茂光先生このごろ俺に目付けてたからな）

「まじかよ」 茂光の授業で宿題忘れたら、また廊下に立たされるぞ

なんとしてもそれは回避しなければ

「すまん 写させてくれ」

「むり」

「即答することないだろ」

「いや俺もしてない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

結局、俺と博は1時間廊下で過ごした・・・

3時間目の休み時間俺と博は職員室に居た

レポートを忘れてきたことで呼び出されていたのだ

「お前たちはいい加減反省をしろ！」

「すみません」

「特に梅井！」

「お前は宿題の意味を知っているか？」

「はい」

「じゃあ何でしてこない？」

「忘れてました」

「俺が叩き込んでたろうか？」

「遠慮させてもらいます」

「お前たち明日までにレポート10枚して来い いいな？」

「はい」

（ようやく開放される）

「あっ 梅井お前は少し残れ」

（え？）

「お先に〜」

なんで俺だけ？

「梅井」

「はい」

「お前に頼みたいことがある」

「なんででしょうか？」

「まあ 簡単なことだ、転校生の学校案内をしてもらいたい」

「え〜なんで俺が・・・」

「むんくがあるのか？」

「いえ」

「よろしい」

人の弱みに付け込んで〜

「明日来るからしつかり案内しろよ」

「わかりました」

そう言つと俺は職員室から出た

くそ〜まあでもレポート5枚にしてくれたからよしとするか  
そう思いながら俺は家へと帰った

「おにーまたレポート忘れたでしょ」

夕食を食べている最中 急に奈那子が話してきた

「なんでしってるんだよ」

「そうなの？」

小鳥も話してきた

「まあな」

「レポート嫌いなの？」

「まあ、そんなとこだ」

「一緒にする？」

「なんでそうなる？」

いつも迷惑かけてるのにこれ以上迷惑はかけたくない

「いやだつて出来ないんだつたら一緒にしたほうがいいと思って」

「そうだよおにー、一緒にしたら？」

「これ以上、小鳥に迷惑をかけたくない」

「私は別に迷惑だ何つて思ったことないよ」

「おにーも思つてたんだ」

「当たり前だよ」

「私のことは気にしないでいいから」

「でも」

「それともけんちゃん私とするのがいや？」

「それは……」

そんなこと言われたら断れないじゃないか

「わかつたいいよ」

「やったあ！」

嬉しそうにする小鳥

(そんなにうれしいことなのかな？)

「じゃあ私はお二人のお邪魔をしないよう部屋に居ます」

「お邪魔って……」

「そんな、ななちゃんが邪魔だなんて」

「それはうそとして部屋に居るから用があるならいつでも呼んで  
そう言つと奈那子はキッチンを後にした

「・・・どうする？」

「レポート先片付けちゃお」

そして俺たちもキッチンを後にした

「ああ ここはこのことを書けばいいと思つよ」

「ああ」

小鳥にレポートを手伝ってもらいながら、ふと思つ

「なあ」

「どうしたの？」

「小鳥つて誰かと付き合ってるの？」

言つた瞬間、小鳥の顔は真っ赤に染まつた

「なな、なによ き、急に」

「いや聞いてみただけ」

「わ、私、誰とも付き合つてないよ」

「ふん」

「好きな人は？」

「・・・いる」

「ほんと じゃあその人とうまくいつたらいいね」

「うん」

小鳥は少しがっかりした表情だった・・・

「よし 終わった！」

「お疲れ様」

「まっただよ」

「じゃあ私も寝るね」

「ああ 今日はありがとうな」

「もしまたわからないことがあつたらいつでも言つてね」

「ああ」

「おやすみさい」

「おやすみ」

小鳥は部屋を出て自分の部屋に戻った

(ああ 疲れた でもこれで茂光を見返せる)

あ！茂光先生が言っていた転校生ってどんな人だろう  
そんなことを考えながら俺は眠りについた。

続く

## 第一話 いつもの日々（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます

第二話はただいま製作中です

また機会がありましたら『青空の下で』をよろしくお願いします

## 第二話 転校生

ピピッ！ピピッ！

俺は目覚ましの音で目が覚めた

「もう朝か」

「けんちゃん 起きてる？」

タイミングよく小鳥が起こしに来た

「今起きたとこ」

「珍しいね けんちゃんが一人で起きるなんて」

本当にそうだった

いつもなら目覚ましがなっても寝ていた俺が今日に限って起きていたのだ

「あまり眠れなかったの？」

小鳥は心配して声をかけてきた

「いや、よく眠れたよ」

「そう・・・体調が悪いなら無理しちゃだめだからね」

「わかってるって」

「もう少しで朝ごはん出来るから早く降りてきてね」

そう言つと小鳥は部屋から出ていった

俺は制服に着替えるとキッチンに行った

「おはよう、珍しいね おにーがこんな時間に降りてくるなんて」

「おはよう」

「なんかあった？」

奈那子は少しにやけた表情で尋ねてきた

「なんもないけど」

「ほんと〜？」

「何が言いたい？」

「いや別に〜」

どうしたんだろ？

そう思っていたとき

「二人とも朝ごはんできたよ」

小鳥が朝ごはんを運んできた

「いつもありがとうな」

俺が声を掛けた瞬間

「あう」

小鳥はキッチンにある段差に躓いてしまった  
ガシャーン

持っていたお皿が床に落ち割れてしまった

「小鳥、大丈夫か？」

「こと姉、怪我とかない？」

「大丈夫 ごめんね、お皿割っちゃて」

「そんな気にすんな」

「そうだよ」

「うん」

結局、危ないから俺が割れたお皿を掃除して、学校へ行った  
その間、小鳥は落ち込んでいた

キーコン カーコン

「今日はこのクラスに転校生がいる」

茂光先生が話し出した

(転校生？昨日言ってた)

「おい 入れ」

「は、はい」

ドアを開けて入ってきたのは女の子だった

「えっと 東菜たばな中学校から転校してきました、  
里崎さとあき稜なつめといます」

「うお~~~~~!!!」

複数の男子が雄たけびを挙げた

「あつ あの」

それに驚いたのか彼女は机に隠れてしまった

「おい、お前ら 少し黙つとけ！」

それを見かねた茂光先生が男子を黙らした

「と言うことなんで仲良くしろよ」

「あつ、あの よろしくお願いします」

彼女も少し落ち着いたのか机から出て挨拶をした

「えくと 席は 梅井の隣だ」

「あつ はい」

「それと梅井」

「はい」

「昨日のこと頼んだぞ」

「わかってます」

先生と話してる間に彼女は自分の席に座っていた

「よろしく 僕は梅井健太 後で学校を案内するから」

「ありがとうございます」

放課後俺は里崎さんに学校を案内していた

「えくとここが音楽室 これで大体説明したけど わからなかったことなかった？」

「いえ ありませんでした」

「そう よかった」

「ありがとうございます」

「そんなに気にしないでいいよ」

「言えない、先生にはめられたなんて・・・」

「あの 梅井さん」

「なに？」

「変なこと聞くようですが 昔お会いしたことありませんか？」

「たぶんないと思うけど」

「ごめんね、子どもの時の記憶がないんだ僕」

「えっ？」

「8歳の時に交通事故にあったみたいでそのときに子どもの時の記憶なくしちゃったみたいで」

「すみません」

「別に誤らなくていいよ」

そう俺の記憶には子どものころの記憶がない

両親と旅行に行っている最中にトラックと衝突した時に頭を強く打つたらしく

ほとんど記憶がない

「それにしてもどうしたの？ 子どものころに会ったことあるの？」

「私 子どものころ、ここに住んでいたんです」

「そのときにやさしくしてくれた男の子に似ていたから そうかな  
と思って」

「えっ？」

「ごめんね こんなこと言って」

「今日はありがとう」

「ああ、」

「それじゃあ、梅井さん ばいばい」

「あ、うん」

そう言つと里崎さんは帰っていった  
もう7年も経つのか

続く

### 第三話 7年前の出来事

それはまだ太陽が暑い日のことだった  
ブーン

僕の家族は夏休みを利用して海に来ていた

健太「うあゝ海だ！」

奈那子「ほんとだね」

母「乗り出しちゃ危ないわよ」

健太&奈那子「はい」

父「もうすぐ着くからな」

それは楽しい旅になるはずだった

父「このカーブを曲がったら見えてくるぞ」

健太&奈那子「わい」

車がカーブを曲がるうとした瞬間、目の前に一台の車が見えた

健太「……………！」

車が見えた時、とっさに奈那子に覆いかぶさった

キューン ドン

それは一瞬のことだった

急に体が前の座席にぶつかった

健太「ううう」

体が痛かった

今にも意識が飛びそうな中で泣き声が聞こえた

奈那子「うえくん」

奈那子だった どうやら無事だったみたいだった

俺は今にも意識がなくなりそうな中で奈那子に声をかけた

健太「大丈夫だよ だから泣かないで……………」

僕はそう言つと意識が遠ざかつて行った

奈那子「おに……………ん……………い……………」

そして何も聞こえなくなっていた

ピッ　ピッ　ピッ

気づいた頃にはベットの上がった

健太「うっ」

看護師「大丈夫ですか？」

健太「ここどこ？」

看護師「病院ですよ」

健太「なんで病院に居るの？」

看護師「健太君怪我しちゃったから治すために居るのよ僕がけが？」

看護師「奈那子ちゃんもいますよ」

健太「えっ？」

奈那子も？けが？

健太「ななちゃんもけがしちゃったの？」

看護師「隣で寝てるわよ」

奈那子「すうー　すうー」

奈那子は僕の隣で寝息を立てていた

看護師「私は戻るから何かあったらこのボタンを押してね」

健太「うん」

看護師さんは病室を出て行った

それで目が覚めたのか奈那子が起きた

奈那子「おにいちゃん　起きたの？」

健太「うん」

奈那子は僕に飛びついてきた

奈那子「おにいちゃん　よかった目が覚めて」

健太「？」

奈那子「お父さんもお母さんも死んじゃって」

健太「お父さん？お母さん？　ってだれ？」

奈那子「えっ？」

奈那子「お父さん お母さん わすれちゃったの？」

健太「だれなの？」

奈那子「……………」

健太「それよりけが大丈夫なの？」

奈那子「……………」

健太「ななちゃん？」

奈那子「本当に忘れちゃったの？」

健太「？」

奈那子「何を言っているのか僕にはわからなかった

お医者さんによるとけがはひどくないが事故のショックと頭を強く

打ったらしく

そのせいで記憶がなくなったと言ってた

僕たちは親をなくしてしまった

本当なら政府の施設に入れられるのだけど

小鳥ちゃんの家族が僕たちを引き取ってくれた

幸いにも親が加入していた保険があったため学校にも行けるように

なった

普通の中学校に行けるのも小鳥の家族が引き取ってくれたからだ

でも今だに記憶は欠落したままになっている。

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0788h/>

---

青空の下で

2010年10月22日12時04分発行